埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

ペルー南海岸に進出するワルパ：前期中間期における中央アンデスの社会的動態について

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2024-03-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 西澤, 秀行
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/2000056

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

ペルー南海岸に進出するワルパ
― 前期中間期における中央アンデスの社会的動態について ―

Huarpa Expansion to the South Coast of Peru
Social Dynamics of the Central Andes in the Early Intermediate Period

西　澤　秀　行
NISHIZAWA, Hideyuki

南米アンデス地帯では、前期中間期後期から中期ホライズン初期（およそ紀元５～７世紀）にかけて、中央高地南部のアヤクチョ（Ayacucho）盆地と南海岸のイカ－ナスカ（Ica-Nasca）地方のあいだで接触が起こり、両社会の物質文化が相互に影響し合ったと考えられている。中期ホライズン初頭における、国家社会ワリによる南海岸への積極的な進出は様々な考古学上の証拠により裏付けられているが、前期中間期後期におけるアヤクチョ地方ワルパ社会と南海岸ナスカ社会の接触については確たる証拠はなく、いまだ憶測の域を出ていない。そこで本稿では、アヤクチョ地方のニャウィンプキオ（Ñawimpukio）とコンチョパタ（Conchopata）遺跡、ならびに南海岸のワカ・デル・ロロ（Huaca del Loro）とパチェーコ（Pacheco）遺跡から報告されている大型の石製円形構造物の類似性に着目して、前期中間期後期におけるワルパ社会による南海岸進出の可能性を考察した。

Ⅰ．はじめに

南米アンデス地帯では、前期中間期の後期から中期ホライズンの初期（およそ紀元５～７世紀）にかけて、ペルー中央高地南部のアヤクチョ（Ayacucho）盆地と同南海岸のイカ－ナスカ（Ica-Nasca）地方のあいだで接触が起こり、両社会の物質文化が相互に影響し合う結果となった（図１、表１）。このことは、とくに両社会の土器や織物などに見られる美術様式の時間的な変化として映し出されている。しかしその本質については不明な点も多く、長らくアンデス考古学における最

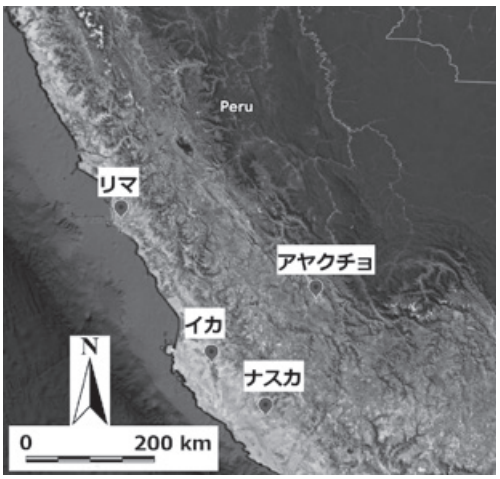

図１　中央アンデス地帯および本稿で取り上げる地方（著者作成）

キーワード：ワルパ、ナスカ、石製円形構造物、前期中間期、中期ホライズン
Keywords　：Huarpa, Nasca, stone-walled circular structure, Early Intermediate Period, Middle Horizon

表１　アヤクチョ盆地と南海岸の時期区分および土器様式（著者作成）

<table>
<tr><th colspan="2">南海岸（ナスカ地方）</th><th>アンデス編年</th><th colspan="2">アヤクチョ盆地</th></tr>
<tr><th>おもな土器様式</th><th colspan="2">時 期 区 分</th><th colspan="2">おもな土器様式</th></tr>
<tr><td>↑</td><td>↑</td><td rowspan="5">中期ホライズン

前期中間期</td><td>↑</td><td>↑</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ナスカ９様式
ナスカ８／ロロ様式</td><td>ナスカ９期</td><td>ワリ１Ｂ期</td><td rowspan="2">コンチョパタ様式
ロブレス・モホ様式
チャキパンパ様式
など</td></tr>
<tr><td>ナスカ８／ロロ期</td><td>ワリ１Ａ期</td></tr>
<tr><td>ナスカ７様式
ナスカ６様式</td><td>ナスカ６・７期</td><td>ワルパ後期</td><td>さまざまな
ワルパ様式</td></tr>
<tr><td>↓</td><td>↓</td><td>↓</td><td>↓</td></tr>
</table>

大の謎のひとつとされてきた。この時期に、アヤクチョ盆地の地元社会はワルパ（Huarpa）からワリ（Wari）へと変化した。同時期に南海岸では依然としてナスカ（Nasca）文化が継続していたが、ナスカ３期（およそ紀元３～４世紀）に政治宗教の中心地として栄えたカワチ（Cahuachi）はすでにその勢力を失っていた（Silverman and Proulx 2002: 249-251）。

ナスカおよびアヤクチョの両地方から出土する土器の分析により、高地アヤクチョ社会が次第に南海岸イカ－ナスカ地方へと、文化的な、やがては政治的な影響力を強めていった様子が明らかとなりつつある。この点を指摘した初期の研究に、Kroeber（1956）、Menzel（1964）、Paulsen（n.d.）、Strong（1957）などがある。とくに、中期ホライズン初頭のワリ社会の強い影響力は、ナスカ社会の多くの物質文化のなかに見て取ることができる。なかでも「ナスカ８／ロロ」様式と「ナスカ９」様式とよばれる南海岸の土器は、ワリ文化の美術様式を色濃く反映していることで知られる。

このように比較的よく知られた中期ホライズン期のワリ社会による南海岸への進出、ならびにそれに付随したナスカ土器への美術様式上の影響とは対照的に、前期中間期後期におけるワルパとナスカ両社会の接触および物質文化の影響関係についてはいまだ憶測の域を出ておらず、ほとんど何もわかっていない。それには、ワルパ社会の集落跡が少数しか知られていないことにくわえ、それらの遺跡から出土する遺構・遺物の数がワリ社会のものにくらべ、圧倒的に少ないことが挙げられる。しかし、1990年代に再開されたアヤクチョ盆地での考古学調査と遺構・遺物の分析は、ワルパ社会ならびにその物質文化について、この知識の空隙を埋めるに足る新たな知見を提供しつつある。

そこで、アヤクチョとナスカ両社会の接触や美術様式上の影響関係について今後の研究の方針を示すべく、本稿ではこれまでにわ

かっている両社会の接触の可能性を示唆する考古学的証拠を整理してみたい。

Ⅱ．ワルパ社会の南海岸進出をめぐる仮説

ワルパ社会によるペルー南海岸進出をめぐって、これまでに提唱されている仮説や推論のうち、必ずしも最初期のものではないがもっとも議論を巻き起こしたものに、アメリカ人考古学者アリソン・ポールセン（Allison Paulsen）による仮説がある。彼女はこの仮説を1980年代に発表したが、実際には1960年代というかなり早い段階から、南海岸ワカ・デル・ロロ（Huaca del Loro）遺跡出土の土器を再度分析して、ナスカとワルパ両文化の美術様式の関連性について研究を進めていた（Paulsen, n.d.）。ワルパ社会による南海岸進出の可能性を探るうえでこの遺跡が重要な鍵を握るので、のちほど詳しく紹介したい。

ポールセンはその研究のなかで、ワカ・デル・ロロ遺跡はナスカ７期から９期にかけて居住・使用されたことを明らかにした。さらに重要なことに、ワカ・デル・ロロ遺跡ならびにトレス・パロスⅡ（Tres Palos II）遺跡は、ワルパ社会が南海岸進出にあたって建設した高地社会の植民集落であった可能性を指摘した（Paulsen 1983）。

> ［ワカ・デル・ロロ遺跡にある］円形の祭祀用建造物［ポールセンの呼称では「Round Temple」］の形状や大きさ、ならびに建設に石を多用していることは、この建造物、ひいてはこの遺跡全体が［アヤクチョ］高地出身の人びとの手になることを証明している。円形の石製建造物は山岳地方にきわめて特徴的なものであり、海岸地方のものではない。実際、この祭祀用建造物それだけで、ナスカ河谷地域に高地の人びとが存在していたことを示す証拠となり、さらには、この遺跡が高地の植民集落であった可能性をも示唆している。［Paulsen 1983: 100　訳および文中の注は著者による］

さらに彼女は、次のように主張を展開していく。

> ワルパ社会の人びとは、＜中略＞ナスカ地方を流れる河川の戦略上有利に位置した地点に植民集落を建設したかもしれない。そうした河川は、南海岸とその東部にある高地［アヤクチョ地方］とを結ぶ自然の連絡路として機能したであろう。これが意味するのは、＜中略＞ワリ期に先行するワルパ社会による［南海岸への］進出こそ、のちに起こるワリ社会の広範な拡張主義へとつながっていった可能性である。［Paulsen 1983: 103-104　訳および文中の注は著者による］

ポールセンの発表以降も、ワルパとナスカ両社会の接触に関して、時折言及されることはあった（たとえば、Knobloch 2000; Leoni 2004; Proulx 1994, 2006; Silverman and Proulx 2002）。ただ、具体的な考古学上の証拠にもとづいて、この議論を深化させる試みが大きな進展を見せることはなかった。そこで以下では、1990年代後半から2000年代初頭にかけて発掘されたアヤクチョ盆地に位置する２つの遺跡――ニャウィンプキオ（Ñawimpukio）とコンチョパタ（Conchopata）――に焦点を当て、そこから出土した新たな遺構・遺物を参照しながら、ワルパ社会による南海岸進

図２　南海岸ナスカ地方（Silverman 2002: Fig.2.2をもとに著者作成）

出の可能性について考察していきたい。この２つの遺跡は前期中間期の後期から中期ホライズンにかけて、ともに居住・使用されたことがわかっている（Isbell and Cook 2002; Leoni 2004）。しかしその前に、南海岸ナスカ社会の遺跡から見ていくことにしよう。

Ⅲ．南海岸ナスカ社会の遺跡

上記の議論からも明らかなように、ワルパ社会による南海岸進出の可能性を探る鍵は、ワカ・デル・ロロを含むペルー南海岸に位置する遺跡にある。南海岸とアヤクチョ盆地の双方から、よく似た形状と大きさの石壁を持つ円形構造物が検出されていることに着目したい。地理的に見て、ナスカとワルパは明らかに２つの独立した社会であり、高い類似性を有する建造物が両地方で見つかることを偶然の一致によって説明することはできない。やはり、どちらか一方から他方への建築様式の伝播ないしは模倣による結果と解するほうが妥当であろう。そして実際、先述したポールセン（Paulsen 1983）が高地ワルパ社会による南海岸進出の可能性を着想するに至ったのも、まさにこの点からであった。

ところが、かつて南海岸にあってナスカ期のものとされた石製の円形構造物はどれも、今日までに消失している。よって、以下に続く考察では、半世紀以上も前に書かれた調査記録に頼らざるを得ない。そうした調査記録のなかには、すでに出版されたものもあれば、一切出版されないままとなっているものもある。そうした状況が、後期ナスカ社会の建築物について研究することを一層困難にさせている。

１）ワカ・デル・ロロ

ワカ・デル・ロロ（Huaca del Loro）遺跡は、リオ・グランデ・デ・ナスカ（Rio Grande de Nasca）河谷地域を流れるラス・トランカス（Las Trancas）川の中流域にかつて存在した遺跡であり、今日では消失している（図２）。この遺跡は、1952年にウィリアム・ダ

ンカン・ストロング（William Duncan Strong）によりはじめて調査された。彼はそこで収集した土器の分析により、アヤクチョ地方の影響がすでにワリ期の始まる前に南海岸に到達していたことを突き止めた。その上で、「ナスカ地方におけるワカ・デル・ロロの土器群はアヤクチョ－ワリの土器群より早いものであり、前者はのちに南海岸に出現した外来のティワナコ（Tiahuanaco）様式［いまではワリ文化の土器様式と同定されている］より時間的に先行している」ことを指摘した（Strong 1957: 41　訳および文中の注は著者による）。同じく重要なことに、彼はこの遺跡で「祭祀用建造物」――ポールセンのところで触れた石製の円形構造物と同一のもの――を発掘し、短いながらその建造物についても報告した。

ストロングの記述および遺跡平面図を参照すると、この建造物は直径がおよそ10～11メートルの円形で、岩や石で作られた壁に漆喰を塗ることで仕上げられている。そうして作られた壁の厚さはおよそ１メートルで、北東側に狭い出入口とみられる開口部がひとつあったことがわかる（Strong 1957: Fig. 16を参照のこと）。

２）パチェーコ

上記のストロングの調査に四半世紀先行する1927年、ペルー人考古学者フーリオ・テーヨ（Julio Tello）がナスカ谷のパチェーコ（Pacheco）遺跡で石壁を持つ円形の建造物を発掘したとされる。ところがこの建造物について最初に記録したのは、ニューヨーク・アメリカ自然史博物館（American Museum of Natural History）のロナルド・オルソン（Ronald Olson）であった。彼は1930年にこの遺跡を訪れて報告書を作成したが、以後彼がその貴重な記録を出版することはなかった。ところが幸運にも、私はアメリカ自然史博物館で直接、彼の報告書や彼が撮影した写真を見ることができた。

1930年「３月13日」および「３月14日」と付されたページには、かなり不鮮明ではあるが、確かにパチェーコ遺跡の石製円形構造物の平面図が描かれていた。彼のスケッチや走り書きのメモ、それに写真（Olson, n.d.）から、この円形構造物が岩や石で作られた壁を３重に擁し、泥の漆喰を塗って仕上げられていたことがわかる。オルソンはこの建造物について詳細な記録を残していないが、写真に写る石壁の痕跡から、もっとも外側を成す壁の直径はおそらくワカ・デル・ロロ遺跡の円形構造物とほぼ同程度であったとみられる。残念ながら、石壁の厚さについては写真から判断することはできなかった。

３）ワカ・デル・ロロおよびパチェーコ出土の土器様式から推定される南海岸の石製円形構造物の建設・使用年代について

ワカ・デル・ロロおよびパチェーコ両遺跡出土の遺構・遺物に関して放射性炭素による年代測定がなされていないため、上記２つの円形構造物の建設や使用について年代を直接知ることはできない。そこで、放射性炭素年代以外の方法を用いて、これらの建造物がいつ建設・使用・放棄されたのか推定する作業が必要となる。アンデス考古学では、相対年代を見積もる際に土器の様式を参照するのが一般的であり、そこから遺構、ひいては遺跡全体の使用年代を推定する方法が広く用いられてきた。土器様式に見られるいかなる変化も時間に敏感であり、土器の様式は時間とと

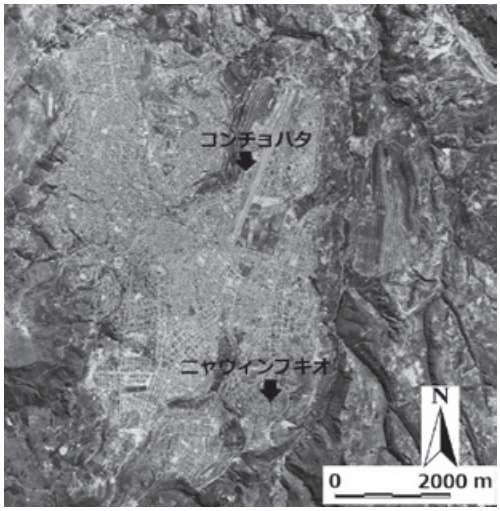

図３　アヤクチョ盆地（著者作成）

もに徐々に、そしてときに急速に、変化するという考え方が根底にある。それゆえ、本稿でもワカ・デル・ロロおよびパチェーコ両遺跡の石製円形構造物の建設・使用・放棄のおよその年代を推定するために、それらの遺跡から出土した土器の様式を参照することにしたい。

ワカ・デル・ロロ遺跡から出土した土器アセンブリジは、ナスカ７様式が認められるものの、多くがナスカ８／ロロ様式およびナスカ９様式の土器片によって占められていた（Paulsen 1983: 100-102）。よって、石製円形構造物を含むこの遺跡は、おそらくナスカ７期に建設されたが、主としてナスカ８／ロロ期からナスカ９期にかけて使用されたと推測できる。アヤクチョ地方の編年で、ナスカ８／ロロ期とナスカ９期はそれぞれ、中期ホライズン１A期と中期ホライズン１B期に相当する（Proulx 2006; Silverman 1988）。よって、ワカ・デル・ロロ遺跡で検出された円形構造物は、前期中間期の終わりまでには建造され、おもに中期ホライズンの初期に使用されたことがわかる。

一方、パチェーコ遺跡から出土した土器アセンブリジは、その多くがナスカ９様式の土器片によって占められていた（Menzel 1964: 30-31）。このことから、この遺跡の建設と使用がアヤクチョ地方の編年では、中期ホライズン１B期にあったことがわかる。さらに、この遺跡で検出された「奉納穴」と解される遺構からは、「ロブレス・モホ」様式の大型儀礼用土器の破片が出土している（Menzel 1964: 23-28）。ロブレス・モホ様式は、ワリ文化の中期ホライズン１B期を代表する土器様式とされる。したがって、パチェーコ遺跡にあった円形構造物の建設と使用は時間的に見て、ワカ・デル・ロロ遺跡のものより有意に遅いと結論づけられよう。

Ⅳ．アヤクチョ盆地ワルパ社会の遺跡

続いて、アヤクチョ盆地に位置するニャウィンプキオとコンチョパタの遺跡を見ていくことにしよう（図３）。両遺跡で1990年代後半から2000年代初頭にかけて実施された発掘調査により、ともに円形の石製建造物が確認されている。以下では、アヤクチョの両遺跡を紹介したあと、そこから検出された円形構造物を、上述した南海岸のものと比較しながら考察していくことにしたい。

１）ニャウィンプキオ

今日残るニャウィンプキオ（Ñawimpukio）遺跡は、現在のアヤクチョ市街に近い同じ名前を持つ丘（ニャウィンプキオ）の最上部（海抜3000メートル）に、南北におよそ200メートル、東西におよそ500メートルにわたり広がっている。遺跡からの見晴らしはよく、辺り一面を眺望することができる。この残る遺

跡部分も、近年のバラック家屋と耕作地の侵入により急速にその姿を消しつつある。前期中間期の後期から中期ホライズンにかけてはいまより広い範囲に集落が分布し、その最盛期には丘の上部全域にくわえ、谷底まで続く西側斜面一帯に家屋が広がっていたとみられる。

これまでに実施された調査のなかで、ニャウィンプキオ遺跡は地形や建築物の分布にもとづき、いくつかの区画に分けられてきた。たとえば、1970年代にこの遺跡を調査したルイス・ルンブレラス（Luis Lumbreras）は、A、B、Cという３つのセクターに区画している（Lumbreras 1974a, 1974b, 1981）。2000年代に入って実施されたフアン・レオニ（Juan Leoni）による発掘では、ニャウィンプキオの丘全体をゾーン（上部、中部、下部）、セクター（東、中央、西）、それにサブ・セクター（建築物の集合）というように体系的に分割している（Leoni 2004, 2006）。以下に紹介する円形構造物や土器アセンブリジは、2001年にレオニが指揮した発掘調査により出土したものである。そのため、本稿でもレオニの区画法を採用する。この区画法では、丘の最上部に残る遺跡中心部を建築物の分布におうじて、さらに「東中央広場」、「北東建築物群」、「南東建築物群」そして「中央建築物群」の４つに区分している。

２）コンチョパタ

コンチョパタ（Conchopata）遺跡は、上述したニャウィンプキオの丘から北に下った広いメサ状の台地に位置する遺跡で、海抜はおよそ2700メートルである。今日、この遺跡はその北側をアヤクチョ空港（Aeropuerto Coronel FAP Alfredo Mendívil Duarte）のターミナルとペルー軍の施設により、東側を空港の滑走路により、南側をアヤクチョ市街地により、そして西側をトトリア（Totorilla）峡谷により囲まれている。アヤクチョ市街地に隣接することからもわかるように、この遺跡は1960年代に始まる都市開発と住宅地のスプロール現象によりこれまでに著しく破壊されてきた。現在では2.5ヘクタールほどしか残されておらず、このわずかに残った部分も徐々に消失しつつある。1950年代に撮影された航空写真からは、かつてこの遺跡がその台地上に40ヘクタール以上にわたり広がっていた様子を見ることができる（Isbell et al. 2003: 9）。長年にわたりアヤクチョで調査・発掘を続けているウィリアム・イスベル（William Isbell）は、1970年代まで台地一面に無数の土器片が散らばっていたことを報告している（Isbell et al. 2000: 15）。

今日コンチョパタに残る遺跡部分は行政官僚や土器職人の住居、政治祭祀用の建造物などが集まる集落の中心部であり、一方、完全に消失している遺跡の周辺部には農耕に携わる庶民の住居があったと考えられている。特筆すべきことに、前者からはパティオ・グループ、中央広場それに隣接した部屋状構造物などの遺構が密集して出土している。一方、後者からは、不規則な形状をした壁や埋葬遺構、それに日常生活を示唆するゴミの堆積層などが散発的に検出されている（Isbell et al. 2000: 14-15）。

Ⅴ．ニャウィンプキオおよびコンチョパタ出土の石製円形構造物

次に、ニャウィンプキオとコンチョパタ両遺跡で検出された石製円形構造物を見ていくことにする。

1）ニャウィンプキオ

ニャウィンプキオ遺跡の東側に位置する「東中央広場」は、南北におよそ45メートル、東西におよそ80メートルにわたって広がるオープン・スペースである（Leoni 2004: 131-169）。この広場からはいくつかの建築物が確認されているが、なかでも目を引くのがレオニにより「EA-12/19」と名付けられた３重の石壁を擁する円形の建造物である（図４）。レオニが指摘するように、「東中央広場はアヤクチョ地方で実際に発掘された数少ないワルパ社会の儀礼用建造物のひとつであり、そこから得られる情報は、［前期中間期ワルパ社会の］ほとんど知られていない儀礼上の実践を理解するうえで重要な手がかりを与えてくれる」（Leoni 2004: 168　訳および文中の注は著者による）。

EA-12/19を構成する３重の石壁のうち、もっとも外側のものは直径がおよそ11メートル、厚さはおよそ１メートルに達する。この壁は表面に加工のない自然石を横２列平行に並べ、そのあいだを土や砂利で埋めることで作られている（Leoni 2004: 154-155）。壁の北側には、おそらく出入口として使われた狭い開口部がひとつ設けられている。この開口部からは、アヤクチョの地元で古くから聖なる山として崇められてきたラスウィルカ（Rasuwillka）山を臨むことができ、ワルパ期にもこの円形構造物を用いて儀礼が行われたことがうかがえる（Leoni 2004: 164）。この建造物の床面から採取された試料の放射性炭素年代測定の結果は紀元408～560年（補正値）を示しており、これが前期中間期の後期に建てられたことがわかる（Leoni 2004: 125-126, 633）。

実際に私がアヤクチョの国立ワマンガ大学

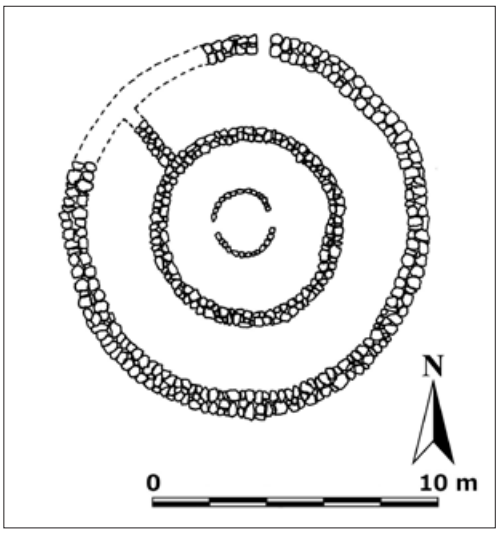

図４　ニャウィンプキオ遺跡の石製円形構造物（Proyecto Arqueológico Ñawinpukyo の調査記録をもとに著者作成）

（Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga）で行ったEA-12/19出土の土器アセンブリジの分析でも、様式判定可能な実質的にすべての土器片（98.4%）がワルパ期に属するものであったことを確認している（西沢 2015: 73）。よって、土器様式の分析も放射性炭素年代測定の結果を裏付けるかたちとなっている。

2）コンチョパタ

1999～2003年にかけて、アメリカ人考古学者のウィリアム・イスベル（William Isbell）とアニータ・クック（Anita Cook）により、今日残るコンチョパタ遺跡の東側半分――「セクターB」――で大規模な発掘調査が実施された。このセクターは南北におよそ120メートル、東西におよそ80メートルにわたって広がり、中期ホライズン期には行政官僚や土器職人などが集まる、かなり密集した居住地を形成していたとみられる。ここでは、非

常に多くの隣接した部屋状構造物、２つの広場、少なくとも３つのパティオ・グループ、明確な輪郭を持つ円形構造物がひとつ、おそらくは３つないしは４つの円形構造物であったとみられる痕跡、さらには明確な輪郭を留めるD字型建造物がひとつと、もうひとつ別のD字型建造物の痕跡が確認されている。

先述したニャウィンプキオ遺跡の円形構造物と同様に、コンチョパタ遺跡で検出された明確な輪郭を持つ円形の建造物――「EA-143」――も前期中間期の終わりまでに建設されたと考えられる（図５）。この建造物に関して放射性炭素を用いた年代測定はなされていないが、そこから出土した土器アセンブリジには､少ないながらも無視できない量（様式判定可能な土器のうちの6.9％）でワルパ様式の土器片が確認されている（西沢 2015: 73）。よって、この建造物は前期中間期の終わりまでには建設されたことがわかる。ところが、ニャウィンプキオ遺跡のものとは異なり、コンチョパタの円形構造物は中期ホライズンになっても使用され続けた可能性が高い。そう考えられる理由は、ワリ文化に特有な方法で作られたトロフィー・ヘッドが21体もこの遺構で確認されている（Tung 2003, 2007, 2008）ことにくわえ、そこから出土した土器片の大部分が中期ホライズン期の様式で装飾されていたことが挙げられる。とくに、様式判定可能な土器片のうち､「コンチョパタ」様式および「チャキパンパ」様式のモチーフを持つ大型甕・大型壺が土器アセンブリジの大半（54.0％）を占めていたことは注目に値する（西沢 2015: 73）。以上より、コンチョパタではこの円形をした石製建造物が中期ホライズン期にも依然として使用され続けたことがわかる。

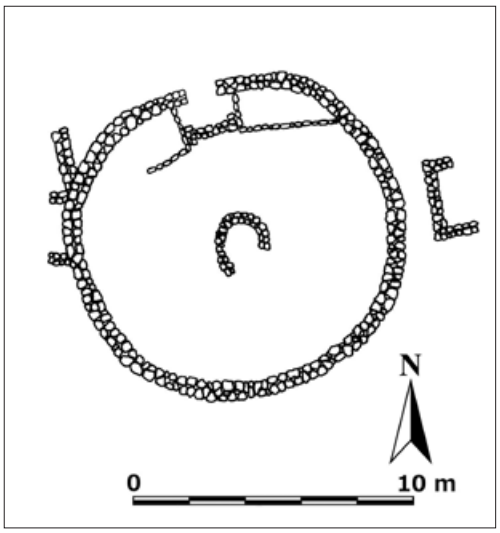

図５　コンチョパタ遺跡の石製円形構造物（Proyecto Arqueológico Conchopata の調査記録をもとに著者作成）

最後に、この円形構造物の大きさと工法についてふれると、外壁の直径はおよそ10.6メートル、厚さは70センチメートルほどで、北側には小さな出入口とみられる開口部がひとつ設けられている。表面に加工のない自然石を横２列平行に並べ、そのあいだを土や砂利で埋めることで作られている。したがって、大きさ、工法ともに、ニャウィンプキオ遺跡の石製円形構造物ときわめてよく類似しているといえる。

Ⅵ. おわりに：今後の研究にむけて

本稿を締めくくるにあたり、これまでに取り上げてきた４つの石製円形構造物の建設と使用に関する時間的な前後関係を整理してみたい。

はじめに、アヤクチョ盆地にあるニャウィンプキオの集落に円形の石壁を持つ建造物が建てられた。この建造物は前期中間期後期のワルパ社会でおそらく儀礼用に使われたが、

その時代の終わりまでには放棄された。この放棄に前後して、別の石製円形構造物の建設が近隣の集落コンチョパタで始まり、それは前期中間期の終わりまでには完成した。おそらくコンチョパタでの建設と時を同じくして、また別の石壁を持つ円形構造物の建設が、今度は南海岸ワカ・デル・ロロでも始まった。ただ、コンチョパタとワカ・デル・ロロの石製円形構造物がいつごろ放棄されたのか定かではないが、双方とも次の中期ホライズンに入ってからも、しばらくのあいだは使われていた可能性が高い。そして最後に、南海岸ナスカ地方のパチェーコに円形の建造物が建てられた。ここでは、明らかに中期ホライズン期に入ってから建設が始まり、そこから出土した土器アセンブリジから判断して、この円形構造物は中期ホライズン１B期という、かなり限られた期間だけ使用されたことがうかがえる。

上記の時間的な考察から、石製円形構造物の建設と使用はナスカ地方ではなく、やはりアヤクチョ盆地で先に始まったとみるほうが賢明であろう。さらに、この建造物の両地方での導入の時間差を考慮すると、アヤクチョ盆地で考案ないしは開始された石製円形構造物の文化がのちに南海岸へと伝えられた、あるいは南海岸の社会がその文化を模倣するようになった、と解釈するのが適切ではないか。くわえて、前期中間期の後期にアヤクチョと南海岸の両社会のあいだですでに何らかの接触が始まっていれば、中期ホライズン期にワリが国家の建設と拡張をするなかで、南海岸への進出を大いに強化したとみてもまったく不思議ではない。かつてヘレイン・シルバーマン（Helaine Silverman）が端的に述べたように、ワルパを発端とするアヤクチョ社会による南海岸への侵入こそ、のちの中期ホライズンの開始時に、ワリが「中央ペルー南部の勢力軸を、それまでの海岸部［ナスカ社会］から高地［ワリ社会］へと移す」ことができた主たる要因だったのではなかろうか（Silverman 1988: 28　訳および文中の注は著者による）。

しかしここで、先述したポールセンの仮説に対して批判が寄せられたことにも目を向ける必要がある。そうしたなかに、カタリーナ・シュライバー（Katharina Schreiber）による1989年の指摘がある。

> 明らかに、ナスカ地方では円形構造物は少なくともナスカ２期から一般的であり、それはワカ・デル・ロロ遺跡が居住・使用されたナスカ７期・８期・９期に先行する。したがって、この遺跡に円形の石製建造物があるからといって、それが山岳地方から人びとが侵入したことの証拠とはならない。むしろ、ナスカ地方に古くからある建築様式の伝統にすぎないと考えるほうが自然である。同様に、［ワカ・デル・ロロ遺跡の円形構造物の］建築資材として自然石を使う工法は［ナスカ地方では］めずらしいことではない。この遺跡がラス・トランカス谷中流域にあったことを考えれば、その付近での建築物が主として石造りであることは当然ともいえる。［Schreiber 1989: 72　訳および文中の注は著者による］

確かに現在、南海岸に建設された石製円形構造物の起源として、アヤクチョ盆地以外（とくに他の山岳地方）の可能性も排除できない。同じく、ポールセンの仮説の後半部分――か

つて南海岸に存在したワカ・デル・ロロやそれに類似した遺跡は、ワルパ社会による南海岸進出を意図した植民集落であった――も現在手に入る証拠からは、その妥当性を評価することはできない。

ワルパ社会による南海岸進出の可能性について、こうした批判にも堪え得る主張を展開するためには、私たちはこれからワルパとナスカ両社会の建築以外の分野でも同様のプロセスが見られることを示さなければならない。私は現在、ワルパ文化と後期ナスカ文化の土器、なかでもゴブレット形をした土器に着目して、石製円形構造物と同様の文化的な影響関係が見られるのか調査を進めている（西沢2023）。ゴブレット形土器とは、日本語では「高坏形土器」などともよばれるもので、器の腰部分が細くなった特異な形状を示す。この器形を有する土器は、これまでにアヤクチョと南海岸の両地方から出土が確認されている。ナスカ文化を専門とする一部の研究者からは、ゴブレット形土器はナスカ７期の後半になって突如として南海岸に出現したことが指摘されている（Proulx 1994, 2006; Silverman and Proulx 2002）。

私の知る限り、ナスカのゴブレット形土器の起源を探ろうとした研究はまだない。目下、私はゴブレット形土器の考えられる起源として、前期中間期のアヤクチョ社会に着目している。今後は、形状や装飾上の特性などからゴブレット形土器の様式分析を精緻化することにくわえ、中性子放射化分析のような土器の胎土や表面装飾に使われた顔料の成分分析から、その土器がどこで作られたのか特定する研究を進めていきたい。たとえば、ワルパ出土のゴブレット形土器とナスカ出土のそれとが同一の胎土を持つことが証明され、かつ、それらの原料がアヤクチョ地方で産出することが確認できれば、そのときはじめて、ゴブレット形土器は前期中間期にアヤクチョ地方で製作され、南海岸へ伝えられたと結論づけることができる。また、ゴブレット形土器が南海岸へと伝えられるときに、あわせて石壁を持つ円形構造物を建設・使用する文化もアヤクチョ地方からもたらされたと推論することも可能となるであろう。

今後、私たちがさらなる研究をとおして行き着く先がどこであれ、少なくともいまの段階でひとつだけ言えることがある。それは、すでに前期中間期の後期には、アヤクチョ盆地でも、南海岸イカ－ナスカ地方でも、のちに中央アンデス一帯を激動の渦へと巻き込むことになる「中期ホライズンの到来」を予兆させる動きが、静かに――だが、確実に――表出しはじめていたということである。

謝辞

Proyecto Arqueológico Ñawinpukyoを指揮したフアン・レオニ博士より、ニャウィンプキオ遺跡出土の土器を分析する機会をいただきました。一方、Proyecto Arqueológico Conchopataを指揮したウィリアム・イスベル博士とアニータ・クック博士より、コンチョパタ遺跡出土の土器を分析する機会をいただきました。さらに、バーバラ・ウルフ博士より、コンチョパタ遺跡の遺構・遺物に関して詳細なお話をうかがいました。先生方の寛大なお心遣いに感謝の意を表します。

参照文献

Isbell, William H., and Anita G. Cook
2002 A New Perspective on Conchopata and the

Andean Middle Horizon. In Andean Archaeology II: Art, Landscape, and Society, edited by Helaine Silverman and William H. Isbell, pp. 249-305. Kluwer Academic/Plenum Publishers, New York.

Isbell, William H., Anita G. Cook, and Martha Cabrera Romero

2000 Informe al Instituto Nacional de Cultura del Perú, Proyecto Arqueológico Conchopata, Año 2000. Unpublished project report.

2003 Proyecto Arqueológico Conchopata Temporada de Campo 2003, Excavaciones Complementarias Sectores A y B. Unpublished project report.

Knobloch, Patricia J.

2000 Cronología del Contacto y de Encuentros Cercanos de Wari. In Huari y Tiwanaku: Modelos vs. Evidencias, edited by Peter Kaulicke and William H. Isbell, pp. 69-87. Boletín de Arqueología PUCP, vol. 4. Departamento de Humanidades, Especialidad de Arqueología, Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

Kroeber, Alfred L.

1956 Toward Definition of the Nazca Style. In University of California Publications in American Archaeology and Ethnology, volume 43, number 4, pp. 327-432. University of California Press, Berkeley.

Leoni, Juan Bautista

2004 Ritual, Place, and Memory in the Construction of Community Identity: A Diachronic View from Ñawinpukyo (Ayacucho, Peru). Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, State University of New York, Binghamton.

2006 Ritual and Society in Early Intermediate Period Ayacucho: A View from the Site of Ñawinpukyo. In Andean Archaeology III: North and South, edited by William H. Isbell and Helaine Silverman, pp. 279-306. Springer, New York.

Lumbreras, Luis G.

1974a Las Fundaciones de Huamanga: Hacía una Prehistoria de Ayacucho. Editorial Nueva Educación, Lima.

1974b The Peoples and Cultures of Ancient Peru, translated by Betty J. Meggers. Smithsonian Institution Press, Washington, DC.

1981 The Stratigraphy of the Open Sites. In Prehistory of the Ayacucho Basin, Peru, Volume II: Excavations and Chronology, edited by Richard S. MacNeish, Angel Garcia Cook, Luis G. Lumbreras, Robert K. Vierra, and Antoinette Nelken-Terner, pp. 167-198. University of Michigan Press, Ann Arbor.

Menzel, Dorothy

1964 Style and Time in the Middle Horizon. Ñawpa Pacha 2: 1-106.

Olson, Ronald L.

n.d. Unpublished manuscript in 1930.

Paulsen, Allison C.

1983 Huaca del Loro Revisited: The Nasca-Huarpa Connection. In Investigations of the Andean Past: Papers from the First Annual Northeast Conference on Andean Archaeology and Ethnohistory, edited by Daniel H. Sandweiss, pp. 98-121. Cornell University Latin American Studies Program, Ithaca.

n.d. Pottery from Huaca del Loro, South Coast of Peru. Unpublished manuscript in 1965.

Proulx, Donald A.

1994 Stylistic Variation in Proliferous Nasca Pottery. Andean Past 4: 91-107.

2006 A Sourcebook of Nasca Ceramic Iconography: Reading a Culture through Its Art. University of Iowa Press, Iowa City.

Proyecto Arqueológico Conchopata

n.d. Unpublished site record in 1999-2003.

Proyecto Arqueológico Ñawinpukyo

n.d. Unpublished site record in 2001.

Schreiber, Katharina J.

1989 On Revisiting Huaca del Loro: A Cautionary Note. Andean Past 2: 69-79.

Silverman, Helaine

1988 Nasca 8: A Reassessment of its Chronological

Placement and Cultural Significance. In Multidisciplinary Studies in Andean Anthropology, edited by V. J. Vitzthum, pp. 23-32 and Figure 1-Figure 17. Michigan Discussions in Anthropology, volume 8. Ann Arbor.

2002 Ancient Nasca Settlement and Society. University of Iowa Press, Iowa City.

Silverman, Helaine, and Donald A. Proulx

2002 The Nasca. Blackwell Publishers, Malden.

Strong, William Duncan

1957 Paracas, Nazca, and Tiahuanacoid Cultural Relationships in South Coastal Peru. Memoirs of the Society for American Archaeology 13. Society for American Archaeology, Salt Lake City.

Tung, Tiffiny A.

2003 A Bioarchaeological Perspective on Wari Imperialism in the Andes of Peru: A View from Heartland to Hinterland Skeletal Populations. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of North Carolina at Chapel Hill.

2007 From Corporeality to Sanctity: Transforming Bodies into Trophy Heads in the Pre-Hispanic Andes. In The Taking and Displaying of Human Body Parts as Trophies by Amerindians, edited by Richard J. Chacon and David H. Dye, pp. 481-504. Springer, New York.

2008 Dismembering Bodies for Display: A Bioarchaeological Study of Trophy Heads from the Wari Site of Conchopata, Peru. American Journal of Physical Anthropology 136: 294-308.

西沢秀行

2015 ワルパ社会のペルー南海岸進出の可能性について『チャスキ』52号。

2023 ワルパとナスカの接触：ゴブレットは語る『チャスキ』65-66号。